『週刊ポスト』2020.10.5(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第134回 レモンティーの香り漂う、浅丘ルリ子の愛の囁き

戦後を代表する「歌う映画スター」といえば、高田浩吉・鶴田浩二の師弟コンビを除くと、日活の小林旭と石原裕次郎で異論はないでしょう。昭和30年代、老舗映画会社の日活は、ニュースターを自前で発掘し、赤木圭一郎、和田浩治、浜田光夫、高橋英樹、山内賢、渡哲也、杉良太郎等、旭&裕次郎に次ぐスター候補には歌手としてもアピールさせ、映画と歌を連動させた作品を映画化していきます。副業は女優にも適用され、浅丘ルリ子、吉永小百合、松原智恵子らが兼業歌手として続きました。

しかし東京五輪後、映画業界の衰退に伴い、浅丘ルリ子が日活との契約を解消、活躍の場をテレビ、レコード業界へと広げていき、昭和43年にはNHKの大河ドラマ『竜馬がゆく』で主演・北大路欣也の相手役、おりょうさんとして登場、この1年でファン層が一気に拡大されます。そしてその翌年、昭和44年に発売された新曲が『愛の化石』(詞・並木六郎、曲・三木たかし、編・高見弘)でした。

悲しみの涙があの人の幸せに
心をぬらした時　それをひとは
愛と呼ぶのでしょうか

興行界を代表するトップ女優が冒頭からこう語りかける歌はきわめて異色でしたが、この1曲で歌手・浅丘は全国的に認知され、「愛するって耐えることなの」の名台詞は、今なら流行語大賞に選ばれるくらい広まりました。

歌と語りが交差するこの曲は、「朗読劇+映画音楽+イージーリスニング」で構成され、作詞者は、朗読部分を失恋相手へのモノローグ(独白)調にし、歌唱部分を従来の歌謡曲的歌詞で男女のドロドロ関係を表現、聴いている男性たちは4分弱の朗読劇の中でルリ子さんとの共演を妄想することさえできました。

朗読から歌声に変わるサビの部分は、ヘンリー・マンシーニ作曲の映画音楽『シャレード』を模した旋律になっていますが、作曲者はオードリー・ヘプバーンのスレンダーとファッショナブルな美しさを、芦川いづみの後輩、浅丘にもなぞらえていたのでしょうか。

台詞の延べ時間は1分半近くに及びますが、編曲者はこの3拍子の曲を、『シバの女王』で知られるレーモン・ルフェーブル楽団の『哀愁のアダージョ』(3拍子)や、日本ではさほど知られていなかったフランク・プゥルセル楽団『アドロ』(3拍子)などを参考に、浅丘のスキャットを女性コーラス風に挿入、イージーリスニング風の朗読歌謡に仕上げました。

この曲が大ヒットしたあと、「レモンティーはあなたとの口づけの香り(後略)」などの歌詞に対する盗作問題が持ち上がります(『女の詩集』新川和江選掲載の城道子の作品と酷似)。そうした影響でしょうか、ミリオンセラーにもなったこの曲を見聞きすることが減り、愛の歌が化石になってしまいそうです。

浅丘ルリ子は、昭和48年公開の『男はつらいよ』第11作『寅次郎忘れな草』からクラブ歌手・リリー役として登場しますが、私の中では『愛の化石』を歌う歌手・浅丘に重なります。このヒット曲があったからこそ、リリーの当たり役に巡り合えたのかもしれません。

JASRAC出 2007699-001

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』(グスコー出版)が好評発売中